

平成22年 5月 6日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520599

研究課題名（和文）ペルシア語書簡術・文章術とイラン・イスラーム文化

研究課題名（英文） Persian epistolary and prose art and Perso-Islamic Culture

研究代表者

渡部 良子（WATABE RYOKO）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：10447500

研究代表者の専門分野：歴史学・前近代イラン・イスラーム史

科研費の分科・細目：人文学・史学・東洋史

キーワード：イラン イスラーム ペルシア語 ペルシア語文化圏 書記術 官僚 文書学
文書行政

1. 研究計画の概要

- (1) 本研究は、9世紀に成立して以降、イラン・トルコ・中央アジア・インドなど、ユーラシアの広大な領域の文章語として共有され、これらの地域の伝統文化の形成に影響を与えた近世ペルシア語文章語の発展と歴史的変容に、ペルシア語の広域拡大の大きな要因であったと考えられる文書行政の書記官僚技術の手引書・文書用例集の分析を通し、光を当てることを目指す。
- (2) 従来本格的に研究されることがなかったペルシア語書記術手引書を、イランを中心とする諸国の写本所蔵機関で可能な限り網羅的に発掘・蒐集し、ペルシア語書記術関連史料の総合的な詳細書誌情報を研究者に利用可能な形で整理する。
- (3) これらの文献から、ペルシア語の文書・書簡の儀礼・規範がどのように発達し、それが国家・社会の秩序とどのような関連性を持っていたのかを明らかにするデータを抽出する。これにより、近代国家成立前のユーラシア・ペルシア語文化圏の歴史における国家・社会と言語の関わりを明らかにする手がかりをつかむ。

2. 研究の進捗状況

- (1) 主要な目的である前近代ペルシア語書記

術手引書の蒐集と書誌情報整理は、これまでの先行研究において行われたことがなかった分量・精度のデータを蓄積した。

- (2) 書記術手引書文献に基づき、ペルシア語文書・書簡の儀礼の発達・変遷に関わるデータを抽出し、その一部は口頭発表として発表した。
- (3) ペルシア語書簡術・文章術と国家権力の関わりを示す、書記官僚の宮廷文学について新たな研究を行い、ペルシア語文章術がどのように王権や支配の正統性の強化に関与していたのかを明らかにし、口頭発表として発表した。

3. 現在までの達成度

- (2) おおむね順調に進展している。

理由：3年間の調査研究により、現在の学界でその所在が明らかにされている（但し、本格的な調査はなされていない）前近代のペルシア語書記術手引書の大多数を実権調査しえた。また、書記術および書記官僚の宮廷文学作品の分野で新発見の史料の発掘も成し得、ペルシア語書記術関連資料研究でより広く充実した研究環境を整えるという目標は、研究期間中にほぼ達成し得ると思われる。

4. 今後の研究の推進方策

- (1) 世界有数のペルシア語写本史料所蔵機関を擁するトルコにおいて書記術関連資料の実見調査を行う。

- (2) 蓄積したペルシア語書記術関連文献の詳細書誌情報を整理し、総合的な文献目録としてまとめる。
- (3) ペルシア語書簡術・文章術の規範の形成と、その国家・社会との歴史的関連性に関し、これらの文献資料から抽出した情報を整理し、ユーラシア・ペルシア語文化圏の比較研究の土台を作る。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

渡部良子「Daftar-i Dilgushaに見えるシャバーンカーラ史の叙述---モンゴル時代史研究における韻文史書利用の可能性」『上智アジア学』25(2008)pp. 49-80.(査読なし)

〔学会発表〕(計 2 件)

WATABE Ryoko, “Images of Mongols and Their Legitimacy in Persian Literatures in the Ilkhanid Period”, International Workshop: The Formation of Perso-Islamic Culture: The Mongol Period and Beyond (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 1st March 2009)

渡部良子「14 世紀モンゴル支配期イランにおける文書行政と伝統的ペルシア語書記術：文書の構成と定型的表現を手がかりに」AA研フォーラム (2009 年 11 月 5 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)